



The 111th Meeting of
Japanese Society of Pediatric Psychiatry and Neurology

第111回 日本小児精神神経学会

プログラム・抄録集

テーマ

子どものくせとこだわり



会期 ◆ 2014年 **6月13日金**・**14日土**

会場 ◆ 伊藤国際学術研究センター内
伊藤謝恩ホール

会長 ◆ **金生 由紀子**

東京大学大学院医学系研究科 こころの発達医学分野
東京大学医学部附属病院 こころの発達診療部



The 111th Meeting of
Japanese Society of Pediatric Psychiatry and Neurology

第111回 日本小児精神神経学会

(((プログラム・抄録集)))



子どものくせとこだわり

会 期 ◆ 2014年 **6月13日**金・**14日**土

会 場 ◆ 東京大学 伊藤国際学術研修センター
B2F 伊藤謝恩ホール

会 長 ◆ 金生 由紀子

東京大学大学院医学系研究科こころの発達医学分野
東京大学医学部附属病院こころの発達診療部

ご挨拶

この度、日本小児精神神経学会を東京にて開催することになりました。交通の便がやや悪い東京大学の中では、地下鉄の駅の近くであると同時に赤門のすぐ隣と分かりやすい場所にある伊藤謝恩ホールを会場として、多くの方々のご参加をお待ちしております。

子どもの脳とところと行動について多職種が連携しつつ活動することがますます重要になっている中で、多くの方々が意見交換をしやすいように心がけると同時に、今大会の独自性を出せたらと思って準備を進めてまいりました。第110回大会の大会長である辻井正次先生が「子どもの不器用さとその心理的影響 — 発達性協調運動障害を中心に —」というテーマを掲げられたのに勇気づけられて、自身が関わり続けてきた問題を中心にしようと、「子どものくせとこだわり」というテーマを設定いたしました。

何らかの「くせとこだわり」はだれもが持っているものです。従って、子どもの「くせとこだわり」は、とても幅広く、発達の過程として一時的に認められる場合もあれば、こころの不調の表れや発達障害の症状である場合もあります。時には、チック、抜毛癖、強迫症状、こだわり行動などと同定され、それ自身が治療の対象となることもあります。「くせとこだわり」という切り口から子どもの行動とその基盤にある脳とところについて検討することが、よりよい発達の理解と支援につながると期待されます。

このような「くせとこだわり」を、特別講演、教育講演、ミニワークショップ共に前面に打ち出しました。特別講演には、私が以前にトゥレット症候群と強迫性障害 (obsessive-compulsive disorder : OCD) について学んだ Yale Child Study Center から新進気鋭の児童精神科医である Dr. Michael H. Bloch をお招きすると共に、OCD の症候論を中心とする臨床研究で世界的に活躍しておられる精神科医である松永寿人先生にもご登壇いただくことにいたしました。また、教育講演は、神経科学と臨床心理学という異なる方向から話題を提供していただくことにいたしました。神経科学からは将来を嘱望されている若手研究者である柳下祥先生に、臨床心理学からは昨年度の研修セミナーも担当していただいて本学会でもよく知られている下山晴彦先生にそれぞれお話しいただきます。さらに、ミニワークショップは、長らく本学会で重要な役割を果たすと共にチックを持つ子どもの診療を続けてこられた星加明德先生に私が加わって進めてまいります。

これでは「くせとこだわり」にあまりにこだわり過ぎてしまって、辟易される方もいるかと密かに案じていたところ、「くせとこだわり」を軸にしつつ自閉症スペクトラム障害 (autism spectrum disorder : ASD) をはじめとして幅広くかつ興味深い内容の一般演題31題をご発表いただけることとなりました。

本大会は、東京大学医学系研究科こころの発達医学分野／東大病院こころの発達診療部及びその関係者で運営する文字通りの手作りの会であり、至らぬ点が多々あると思いますが、ご海容いただければ幸いです。「くせとこだわり」を通して有意義な発見のある会になりますように精一杯努めたいと思っておりますので、どうかよろしくお願い申し上げます。

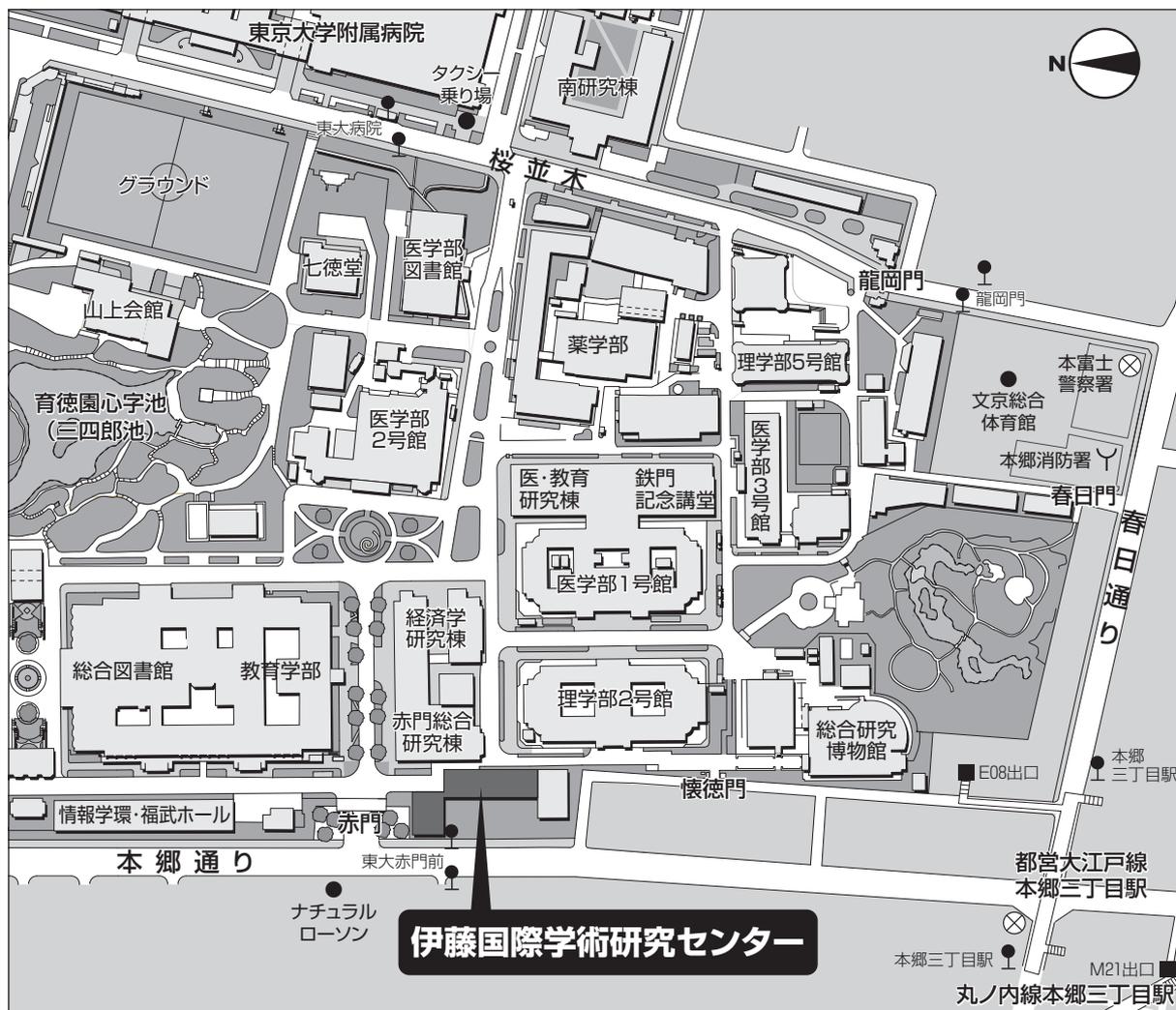
第111回日本小児精神神経学会 大会長

金生 由紀子 東京大学大学院医学系研究科こころの発達医学分野
東京大学医学部附属病院こころの発達診療部

交通アクセス

東京大学 伊藤国際学術研究センター

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 TEL03-5841-0779(平日午前9時~午後5時半)



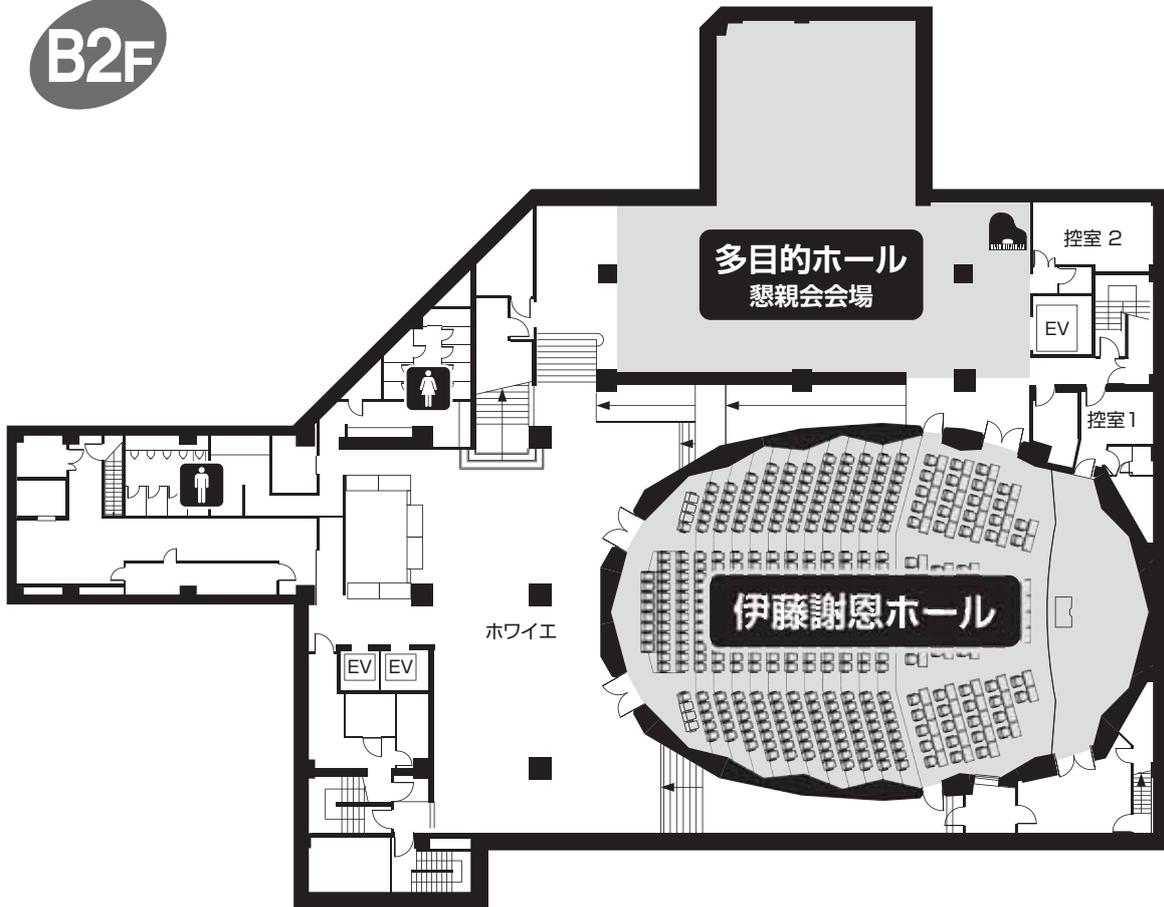
会場へのアクセス

- **地下鉄** [地下鉄丸の内線] 本郷三丁目駅 下車 徒歩8分
[地下鉄大江戸線] 本郷三丁目駅 下車 徒歩6分
[地下鉄千代田線] 湯島駅または根津駅 下車 徒歩15分
- **御茶ノ水駅 (JR中央線、総武線) から乗り換え**
 - ・地下鉄 [丸の内線 (池袋行)] → 本郷三丁目駅 下車 徒歩8分
[千代田線 (取手方面行)] → 湯島駅または根津駅 下車 徒歩15分
 - ・都バス [茶5] 駒込駅南口又は東43 荒川土手操車所前行 → 東大 (赤門前バス停) 下車
 - ・学バス [学07] 東大構内行 → 東大 (龍岡門、病院前、構内バス停) 下車
- **御徒町駅 (JR山手線等) から乗り換え**
 - ・都バス [都02] 大塚駅前又は上69 小滝橋車庫前行 → 本郷三丁目駅 下車 徒歩6分
- **上野駅 (JR山手線等) から乗り換え**
 - ・学バス [学01] 東大構内行 → 東大 (龍岡門、病院前、構内バス停) 下車
- **車** 専用の駐車場はありません。お車でのご来場はお断りしています。

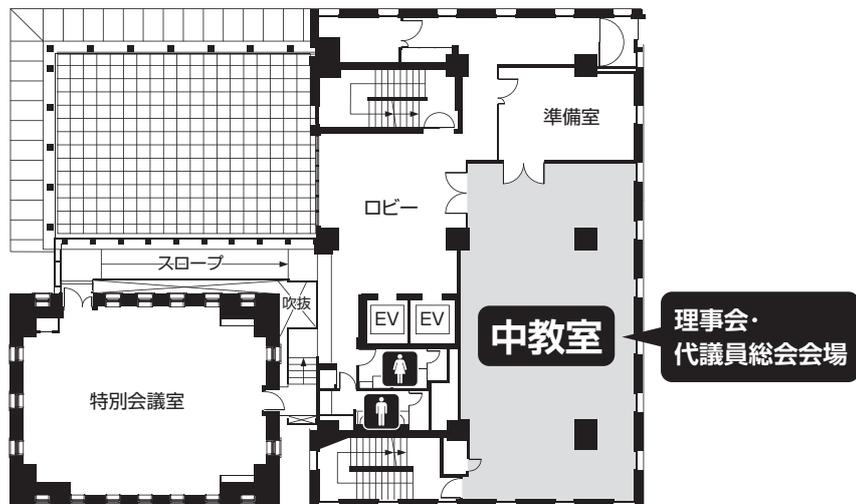
会場図

伊藤国際学術研究センター

B2F



3F



日 程 表

6月13日 金		6月14日 土	
B2F 伊藤謝恩ホール		B2F 伊藤謝恩ホール	3F 中教室
9:00		9:15~9:30 会長講演 座長:岡 明(東京大学) 演者:金生由紀子(東京大学)	
9:30~	9:30~ 研修セミナー・学会受付開始	9:30~10:30 教育講演 2 子どもの“こだわり”に関する 認知行動療法 座長:山崎 知克(子どものこころの診療所) 演者:下山 晴彦(東京大学)	
10:00	10:00~12:00 第15回研修セミナー ねむりのはなし —快を義務に変えた哀しい社会— 座長:小林 繁一(静岡県立こども病院) 演者:神山 潤 (東京ベイ・浦安市川医療センター)	10:40~12:15 一般演題 C (C-1~C-8) ASD への対応 座長:田中恭子(順天堂大学) 桑原 斉(東京大学)	
11:00			11:30~ 13:30 理事会・ 代議員総会
12:00		12:25~13:25 ランチョンセミナー ADHD の診断・治療 ~重症例の入院治療を通じて~ 座長:岩波 明(昭和大学) 演者:宇佐美 政英(国立国際医療研究センター国府台病院) 共催:ヤンセンファーマ株式会社	
13:00	13:00~ 開会のあいさつ	13:35~14:05 会員総会	
13:00	13:05~14:50 一般演題 A (A-1~A-9) 発達障害の診断・検査 座長:宮本 信也(筑波大学) 川久保 友紀(東京大学)	14:10~14:30 日本小児科医会「子どもとメディア」委員会からの呼びかけ	座長: 石井 礼花 (東京大学) 演者: 氏家 武 (北海道こども 心療内科氏家 病院)
14:00		14:30~15:30 一般演題 D (D-1~D-5) 強迫・こだわり 座長:辻井 正次(中京大学) 広瀬 宏之(横須賀市療育相談センター)	
15:00	14:55~15:50 教育講演 1 最近の神経科学からみる強迫症状 座長:米山 明 (心身障害児総合医療療育センター) 演者:柳下 祥(東京大学)	15:30~16:20 一般演題 E (E-1~E-4) 愛着・虐待 座長:奥山 真紀子(国立成育医療研究センター) 星野 崇啓(国立武蔵野学院)	
16:00	15:50~16:45 特別講演 1 DSM-5における強迫スペクトラムの動向 ~小児精神神経障害を中心に~ 座長:宮島 祐(東京家政大学) 演者:松永 寿人(兵庫医科大学)	16:25~17:55 ミニワークショップ チックの子どもをどうみるか 座長:汐田 まどか(鳥取県立総合療育センター) 演者:星加 明徳(北新宿ガーデンクリニック) 金生 由紀子(東京大学)	
17:00	16:50~17:50 一般演題 B (B-1~B-5) 乳児の発達 座長:北山 真次(神戸大学) 渡部 泰弘(秋田県立医療療育センター)	17:55~18:00 閉会のあいさつ	
18:00	18:00~19:00 特別講演 2 Tic-Related Obsessive-Compulsive Disorder 座長:金生 由紀子(東京大学) 演者:Michael Howard Bloch (Child Study Center, Yale University)		
19:00	19:00~ 懇親会 会場:多目的ホール(謝恩ホール隣接)		

プログラム

第1日目 6月13日(金)

10:00～12:00 **研修セミナー**

座長：小林 繁一（静岡県立こども病院）

『ねむりのはなし 一快を義務に変えた哀しい社会』

神山 潤 東京ベイ浦安市川医療センター CEO

※事前申し込みが必要です。研修セミナーのお知らせの項(P14)をご参照ください。

13:00～13:05 **開会のあいさつ**

13:05～14:50 **一般演題 A 9題**

座長：宮本 信也（筑波大学）

川久保 友紀（東京大学）

「発達障害の診断・検査」

A-1 注意欠陥多動性障害 93 例の WISC-IV の特徴

○石川 直子(心理士)¹⁾、河村 雄一¹⁾、鈴木 小央里¹⁾、小笠原 昭彦²⁾

1) ファミリーメンタルクリニック、2) 桑名発達臨床研究室

A-2 発達における困難度と知的能力、人物画および視知覚認知の関連

○高橋 ちひろ（臨床心理学専攻 大学院生）、松崎 くみ子

跡見学園女子大学大学院修士課程人文科学研究科臨床心理学専攻

A-3 かな読字障害のない漢字書字障害の検討

○畑中 マリ(医師)¹⁾、若宮 英司²⁾、竹下 盛³⁾、水田 めくみ³⁾、栗本 奈緒子³⁾、
奥村 智人³⁾、三浦 朋子⁴⁾、中西 誠⁵⁾、玉井 浩¹⁾

1) 大阪医科大学附属病院 小児科、2) 藍野大学 医療保健学部、3) 大阪医科大学 LD センター、
4) パームこどもクリニック、5) 関西大学大学院 心理学研究科

A-4 漢字音読能力の獲得過程における発達の関連性について —コホート調査の結果から—

○景山 貴博(言語聴覚士)¹⁾²⁾、関 あゆみ³⁾⁴⁾、小枝 達也³⁾⁴⁾

1) 鳥取医療生協 鹿野温泉病院、2) 鳥取大学大学院地域学研究科、3) 鳥取大学地域学部、
4) 国立病院機構鳥取医療センター臨床研究部

A-5 音声解析による自閉症スペクトラム障害児と定型発達児の発話区間ごとの識別精度

○中井 靖(心理士)¹⁾、山岡 紀子²⁾³⁾、滝口 哲也⁴⁾、高田 哲²⁾

1)川崎医療短期大学 医療保育科、2)神戸大学大学院 保健学研究科、
3)神戸常盤大学 短期大学部、4)神戸大学大学院 工学研究科

A-6 DSM-IV-TR における PDD と DSM-5 における ASD の診断一致率の検討

○大橋 圭(医師)¹⁾²⁾、水野 賀史¹⁾、宮地 泰士¹⁾、浅井 朋子¹⁾、今枝 正行¹⁾、
渡邊 陽子¹⁾、今橋 寿代¹⁾

1)名古屋市立大学大学院医学研究科 新生児・小児医学分野、2)名古屋市あけぼの学園

A-7 青年・成人期用 Adult Developmental Co-ordination Disorders/ Dyspraxia Checklist 日本語版の開発

○中井 昭夫(医師)

兵庫県立リハビリテーション中央病院 子どもの睡眠と発達医療センター

A-8 シンボル機能の発達とこだわりとの関係 —特別支援学校における調査に基づいて—

○立松 英子(大学教員)¹⁾、太田 昌孝²⁾

1)東京福祉大学、2)NPO 法人 心の発達研究所

A-9 発達障害児における睡眠時前頭部律動性β波についての検討

○中川 栄二(医師)

国立精神・神経医療研究センター病院 小児神経科

14:55～15:50 **教育講演1**

座長：米山 明(心身障害児総合医療療育センター)

『最近の神経科学からみる強迫症状』

柳下 祥 東京大学大学院 医学系研究科 疾患生命工学センター 構造生理部門 特任助教

15:50～16:45 **特別講演1**

座長：宮島 祐(東京家政大学)

『DSM-5における強迫スペクトラムの動向 ～小児精神神経障害を中心に～』

松永 寿人 兵庫医科大学精神科神経科講座

「乳児の発達」

B-1 幼児期早期の極低出生体重児における共同注意行動の発達とその評価 —ビデオ映像記録法に基づく比較検討—

- 山岡 紀子(保健師)¹⁾²⁾、中井 靖³⁾、滝口 哲也⁴⁾、高田 哲¹⁾
1)神戸大学 大学院 保健学研究科、2)神戸常盤大学 短期大学部、
3)川崎医療短期大学 医療保育科、4)神戸大学 都市安全研究センター

B-2 粗大・微細運動発達に遅れのある極低出生体重児は 自閉症スペクトラム障害の特徴を有するか？

- 万代 ツルエ(心理士)¹⁾、藤田 花織¹⁾、長坂 美和子¹⁾、加藤 威¹⁾、森岡 一朗¹⁾、
北山 真次²⁾、飯島 一誠¹⁾²⁾
1)神戸大学医学部附属病院 小児科、2)神戸大学医学部附属病院 親と子の心療部

B-3 乳児院に入所する子どもの発達評価 —ベイリー乳幼児発達検査法第3版を用いて—

- 及川 奈央(医師)¹⁾²⁾、八田 京子¹⁾、池尻 佳奈¹⁾、加藤 久美子¹⁾、三友 聡美¹⁾、
細澤 麻里子¹⁾、岩崎 友弘¹⁾、吉川 尚美¹⁾、田中 恭子¹⁾、清水 俊明¹⁾
1)順天堂大学医学部 小児科、2)済生会川口総合病院 小児科

B-4 極早産児、注意欠如多動性障害及び自閉症スペクトラム障害児における 視線計測を用いた社会的認知機能の比較

- 細澤 麻里子(医師)¹⁾、池尻 佳奈¹⁾、及川 奈央¹⁾、田中 恭子¹⁾²⁾、清水 俊明¹⁾
1)順天堂大学小児科、2)東京大学こころの発達診療部

B-5 乳児院入所児における精神障害の有病率調査

- 山崎 知克(医師)¹⁾²⁾³⁾、岩崎 美奈子²⁾、斉藤 和恵³⁾
1)浜松市子どものこころの診療所、2)神奈川県立汐見台病院小児科、
3)東京慈恵会医科大学小児科学講座

『Tic-Related Obsessive-Compulsive Disorder』

Dr. Micheal Howard Bloch Child Study Center, Yale University

第2日目 6月14日(土)

9:15～9:30 会長講演

座長：岡 明(東京大学)

『子どものくせとこだわり』

金生 由紀子 東京大学大学院医学系研究科こころの発達医学分野
東京大学医学部附属病院こころの発達診療部

9:30～10:30 教育講演2

座長：山崎 知克(子どものこころの診療所)

『子どもの“こだわり”に関する認知行動療法』

下山 晴彦 東京大学大学院教育学研究科 臨床心理学コース

10:40～12:15 一般演題 C 5題

座長：田中 恭子(順天堂大学)
桑原 斉(東京大学)

「ASD への対応」

C-1 保育園での運動発達支援の試み 一年長児の ADHD 様症状に対する運動プログラムの効果

○稲月 まどか(医師)
医療法人 白日会 黒川病院

C-2 Girls 支援での取り組み ～自閉症スペクトラムをもつ児童の症例を通して～

○篠原 里奈(言語聴覚士)、福本 礼、赤壁 省吾
医療法人 栄寿会 天満病院こどもリハビリテーション部

C-3 ASD 児にとってのアンドロイド ～コミュニケーション対象として～

○根本 彩紀子(心理士)¹⁾、熊崎 博一²⁾、友田 明美²⁾、水島 栄²⁾、中野 三津子³⁾、
吉川 雄一郎⁴⁾、松本 吉央⁵⁾、石黒 浩⁴⁾、宮尾 益知³⁾

- 1) 東京学芸大学大学院教育学研究科、
- 2) 福井大学子どものこころの発達研究センター、
- 3) 国立成育医療研究センター、
- 4) 大阪大学大学院基礎工学研究科システム創成専攻知能ロボット学研究室、
- 5) 産業技術総合研究所知能システム研究部門 サービスロボティクス研究グループ

C-4 児童発達支援センターにおける自閉症児の偏食対応の試み

○藤井 葉子(管理栄養士)、山根 希代子
広島市西部こども療育センター

C-5 PECS を中心とした早期療育の効果に関する考察
(5歳～6歳時のフォローアップデータより)

○山根 希代子(医師)¹⁾、今本 繁²⁾

1) 広島市西部こども療育センター、2) ピラミッド教育コンサルタントオブジャパン株式会社

C-6 拒食に対し甘麦大棗湯が有効であったカナータイプ自閉症の1男児例

○牧野 道子(医師)、木下 節子、和田 恵子

東京小児療育病院

C-7 不安障害を呈する自閉症スペクトラム症例について

○小泉 慎也(医師)¹⁾²⁾

1) 静岡医療センター 小児科、2) 日本医科大学千葉北総病院 小児科

C-8 当院におけるこころの発達診療部と小児科との併診について

○高橋 長久(小児科医)

東京大学医学部附属病院小児科

12:25～13:25 **ランチョンセミナー**

座長：岩波 明(昭和大学)

『ADHD の診断・治療 ～重症例の入院治療を通じて～』

宇佐美 政英 独立行政法人国立国際医療研究センター国府台病院 児童精神科

共催：ヤンセンファーマ株式会社

11:30～13:30 **理事会・代議員総会**(3F 中教室)

13:35～14:05 **会員総会**

14:10～14:30 **日本小児科医会「子どもとメディア」委員会からの呼びかけ**

座長：石井 礼花(東京大学)

『スマホに子守りをさせないで!』

氏家 武 北海道小児科医会理事、日本小児科医会子どもとメディア対策委員会員

日本小児精神神経学会 第15回研修セミナー

『ねむりのはなし ―快を義務に変えた哀しい社会―』

講師：神山 潤 先生 東京ベイ・浦安市川医療センター CEO

講師のことば

寝る、食べる、出す、動く(考える)には快が伴います。これはすなわちこれら4要素がヒトという動物の生存に本質的な意味を持つことを示していると考えます。またこれら4要素は密接に結びついています。現代社会ではこれら4要素を生活習慣と称して、しつめるべき要素、といった捉え方をする向きもあるようです。しかし快の観点からすると、そのような取り組みはいかかなものかと感じます。食育で実践されているような前頭葉に重きを置いた流れに従うと、眠りは大切、だから眠りましょう、という流れになります。これでは食も、眠りも、排泄も、運動もいつしか義務となってしまいます。快とは最もかけ離れた、相いれない要素として捉えられてしまいかねません。快を伴うべき要素がいつしか義務となってしまった現代社会の哀しさを感じます。このような哀しさ、誤った方向性が、一部の子供たちを苦しめてしまっているのではないかと感じています。何ができるかはわかりませんが、少なくとも問題意識を共有できればと思っております。

講師プロフィール

東京ベイ・浦安市川医療センター CEO(管理者) 神山 潤(こうやまじゅん)
昭和56年東京医科歯科大学医学部卒、平成12年同大学大学院助教授、平成16年東京北社会保険病院副院長、平成20年同院長、平成21年4月現職。公益社団法人地域医療振興協会理事、日本子ども健康科学会理事、日本小児神経学会評議員、日本睡眠学会理事。主な著書「睡眠の生理と臨床」(診断と治療社)、「子どもの睡眠」(芽ばえ社)、「夜ふかしの脳科学」(中公ラクレ新書)、「ねむりのはなし」(共訳、福音館)、「ねむり学入門」(新曜社)、睡眠関連病態(監修、中山書店)、小児科 Wisdom Books 子どもの睡眠外来(中山書店)「四快(よんかい)のすすめ」(編、新曜社)、「赤ちゃんにもママにも優しい安眠ガイド」(監修、かんき出版)等。

- | | |
|---|---|
| 日 | 時：平成26年6月13日(金) 10:00～12:00 |
| 会 | 場：東京大学 伊藤国際学術研修センター 伊藤謝恩ホール
(東京都文京区本郷7-3-1) |
| 参 | 加 費：日本小児精神神経学会会員 無料
非会員 2,000円(当日会場でお支払い下さい) |
| 申 | 込：必要事項(氏名、所属、職種、日本小児精神神経学会会員・非会員の有無)をご記入のうえ、E-mail か Fax にて下記までお申し込みください。
E-mail : jsppnken@gmail.com Fax : 03-5487-3309
立正大学心理学部 中田洋二郎 |
| 締 | 切：6月10日(火)までにお申し込みください。
人員次第では当日受付もいたします。(先着順で定員次第締切) |

講演

会長講演 6月14日(土) 9:15～9:30

座長：岡 明(東京大学)

『子どものくせとこだわり』

金生 由紀子 東京大学大学院医学系研究科こころの発達医学分野
東京大学医学部附属病院こころの発達診療部

特別講演1 6月13日(金) 15:50～16:45

座長：宮島 祐(東京家政大学)

『DSM-5における強迫スペクトラムの動向 ～小児精神神経障害を中心に～』

松永 寿人 兵庫医科大学精神科神経科講座

特別講演2 6月13日(金) 18:00～19:00

座長：金生 由紀子(東京大学)

『Tic-Related Obsessive-Compulsive Disorder』

Dr. Micheal Howard Bloch Child Study Center, Yale University

教育講演1 6月13日(金) 14:55～15:50

座長：米山 明(心身障害児総合医療療育センター)

『最近の神経科学からみる強迫症状』

柳下 祥 東京大学大学院 医学系研究科 疾患生命工学センター 構造生理部門 特任助教

教育講演2 6月14日(土) 9:30～10:30

座長：山崎 知克(子どものこころの診療所)

『子どもの“こだわり”に関する認知行動療法』

下山 晴彦 東京大学大学院教育学研究科 臨床心理学コース

ミニワークショップ 6月14日(土) 16:25～17:55

座長：汐田 まどか(鳥取県立総合療育センター)

『チックの子どもをどうみるか』

I 星加 明德 北新宿ガーデンクリニック

II 金生 由紀子 東京大学大学院医学系研究科こころの発達医学分野
東京大学医学部附属病院こころの発達診療部

日本小児科医会「子どもとメディア」委員会からの呼びかけ 6月14日(土) 14:10～14:30

座長：石井 礼花(東京大学)

『スマホに子守りをさせないで!』

氏家 武 北海道小児科医会理事、日本小児科医会子どもとメディア対策委員会

子どものくせとこだわり

金生 由紀子

東京大学大学院医学系研究科こころの発達医学分野
東京大学医学部附属病院こころの発達診療部

チックは不随意運動とされてきたが、部分的または一時的であれば随意的な抑制が可能であり、半随意とすることができる。10歳を過ぎると、チックに先立って、むずむずするとかチックを出さずにはいられないという感覚(前駆衝動と呼ばれる)を体験することが多くなる。それに伴って、本人が前駆衝動に応じてチックを出していると表現することもあり、チックが随意と不随意のはざまにあるといっそう明確になる。

前駆衝動に近似した感覚現象としては、“まさにぴったり”と感じられるまで行動せずにいられないということがある。こちらの方がもう少し随意的と言えるかもしれない。この“まさにぴったり”感覚は、チックを伴う強迫性障害(obsessive-compulsive disorder : OCD)を、そうではないすなわち典型的なOCDから区別する重要な特徴でもある。すなわち、典型的なOCDでは不安を解消しようとして悪循環にはまって強迫行為を繰り返してしまうのに対して、チックを伴うOCDでは“まさにぴったり”感覚を追い求めて強迫行為を行うことになる。

チックや強迫症状につながる衝動性のコントロールの問題は、自分にとって大切なものであると思えば思うほど傷つけずにいられないという形で表れることもある。自分の体を叩いたり引っかいたりするという自傷行為、例えばめがねのように壊れやすく大切な物を破壊する行為などが含まれる。本人が止めたいと思うと、衝動性はいっそう高まって、コントロール困難となっていく。

演者は、このように強迫的に生じてしまう衝動性のコントロールの発達に関わる活動を続けてきた。医師としての研修を始めてまもない時期に出会ったトゥレット症候群の青年が、チックのみならず自傷行為も有しており、興味を惹かれたことがきっかけになったと思われる。引き続いて自閉症にトゥレット症候群を併発した児童・青年を担当させてもらう機会があり、トゥレット症候群との縁がさらに深まった。その後、トゥレット症候群を中心に、チックと強迫症状を軸にしつつ、子どものこころと行動の問題にかかわって現在に至っている。軸を一定にすることによって、かえって様々な子どもたちの問題が明確になった面があるように思っている。「くせとこだわり」という本学会のテーマは、この軸に沿いつつ、随意から不随意まで、そして臨床例から非臨床例までの広がりを意識して、さらに活動を展開していきたいとの思いの表れでもある。

共催セミナー

ランチョンセミナー 6月14日(木) 12:25～13:25 座長：岩波 明(昭和大学)

『ADHDの診断・治療 ～重症例の入院治療を通じて～』

宇佐美 政英 独立行政法人国立国際医療研究センター国府台病院 児童精神科

共催：ヤンセンファーマ株式会社

ADHD の診断・治療 ～重症例の入院治療を通じて～

宇佐美 政英

独立行政法人国立国際医療研究センター国府台病院 児童精神科

注意欠如・多動性障害 Attention-deficit/Hyperactivity Disorder (以下、ADHD)は、多動・衝動性および不注意を中核症状にもち、日常生活全般に様々な障害を幼少期から成人期まで引き起こすこともある。

欧米では古くから注目されてきた精神疾患であり、各地で国やこどもの精神科学会が主導で、治療ガイドラインが多数作成されてきた。わが国においても、ADHD の診断および治療に関するガイドラインが2003年に発刊された。

いずれのガイドラインにおいても、子どもにあった治療の戦略を構築する上で、心理社会的および生物学的評価の重要性を説いている。実際の臨床では、いずれの評価も的確にし、心理社会的なアプローチとともに中枢刺激薬などの薬物療法を行ってきたとしても、複雑な家庭環境のためにADHDに関する心理教育が適切におこなえないことや、薬物療法の無効例など、十分な治療効果を得ることができない場合もある。また、強迫性障害、チック障害、素行障害など多彩な併存障害も示されており、その治療に難渋することもしばしば経験する。さらには、ADHDをもつ子どもの激しい衝動性や攻撃性、もしくは重篤な併存障害のために入院治療を要することすらある。

本セミナーでは、ADHDに強迫性障害と素行障害を併存した重症例の入院治療を中心に、ADHDの診断および治療に関して話をします。

略 歴

〈学歴・職歴〉

- 1999年3月 山梨医科大学医学部卒業
- 1999年5月 山梨医科大学精神神経科入局
- 2001年6月 国立精神・神経センター国府台病院児童精神科 レジデント
- 2003年7月 国立精神・神経センター国府台病院児童精神科 医師
- 2009年4月 国立国際医療センター国府台病院児童精神科 医師
- 2010年4月 独立行政法人国立国際医療研究センター国府台病院児童精神科 医師
- 2012年3月 北里大学大学院医療系研究科 卒業

一般演題

A-1

注意欠陥多動性障害 93 例の WISC-IV の特徴

○石川 直子(心理士)¹⁾、河村 雄一¹⁾、
鈴木 小央里¹⁾、小笠原 昭彦²⁾

1) ファミリーメンタルクリニック

2) 桑名発達臨床研究室

【目的】 ADHD の児童に実施をした WISC-IV の結果を検討し、その特徴を解明する。

【対象と方法】 2011年1月より2014年2月までに A クリニックで WISC-IV を実施した事例のうち、DSM-IV により ADHD の診断基準を満たし、全検査 IQ が 70 以上であった、93 例(男児 71 例、女児 22 例、平均 10 歳 8 か月)を対象とした。合成得点と下位検査を標準データと比較した。

【結果】 標準データとの間に以下の有意な差 ($p < .05$) が認められた。

- ①「全検査 IQ」(平均 100.2, SD10.9) は差がない。
- ②「言語理解」(平均 100.9, SD12.8) は差がない。ただし下位検査の「類似」(平均 10.9, SD3.0) のみ高い。
- ③「知覚推理」(平均 103.8, SD13.0) は高い。下位検査の「積木模様」(平均 11.0, SD3.1)、「絵の概念」(平均 10.5, SD2.6)、「絵の完成」(平均 11.3, SD3.5) が高い。
- ④「ワーキングメモリー」(平均 95.2, SD12.0) は低い。下位検査の「数唱」(平均 9.5, SD2.4)、「語音整列」(平均 9.0, SD2.3) が低い。
- ⑤「処理速度」(平均 97.3, SD11.3) は低い。ただし、合成得点の算定には用いない補助検査である「絵の抹消」(平均 11.4, SD2.3) は、逆に高い結果となった。

【考察】 本研究の結果、特にワーキングメモリーや処理速度が低かった。これは Barkley や Rapport らも指摘しているものである。しかし処理速度内では、「絵の抹消」は有意に高くさらに検討が必要である。以上のような認知特性を把握して応用することにより、個々の特徴をうまく活かして生活するヒントになるものと考えられる。

A-2

発達における困難度と知的能力、人物画および視知覚認知の関連

○高橋 ちひろ(臨床心理学専攻 大学院生)、
松崎 くみ子

跡見学園女子大学大学院修士課程人文科学研究科
臨床心理学専攻

【目的】 発達における困難度の高い児童の、知的能力、人物画および視知覚認知の特性を検討することを目的とした。

【方法】 A 県公立小学校に在籍する児童 1 年～3 年 73 名を対象に、

- ①子どもの強さと困難さアンケート(SDQ)、
- ②レーヴン色彩マトリックス検査(RCPM)、
- ③グッドイナフ人物画検査(DAM)、
- ④フロスティグ視知覚発達検査(DTVP)を行った。

【結果】 SDQ において全体的な支援の必要性を示す TDS 得点による、困難度の高群 18 名(25%)と低群 55 名(75%)の各尺度の平均値の差を検討したところ、DAM-IQ、知覚指数(DTVP)は、高群の得点が有意に($p < .05$; $p < .01$)低かった。「行為面」高群は低群より有意に DTVP「FII」(図形と素地)の得点が高かった($p < .05$)。

さらに、DTVP の下位尺度得点「FI」「FII」「FIII」「FIV」を独立変数、RCPM 得点、DAM 総得点、SDQ 各下位尺度得点を従属変数として重回帰分析を行ったところ、「FIII」から RCPM への正の影響($\beta = .313, p < .05$)、SDQ「情緒面」「仲間関係」「TDS」への負の影響($\beta = -.309, p < .05, \beta = -.352, p < .05, \beta = -.258, p < .05$)、「FI」から DAM 総得点への正の影響($\beta = .487, p < .001$)が示された。

【まとめ】 発達における困難度と人物画、視知覚認知能力、に関連がみられた。「行為面」高群は、複雑な図形から刺激図形を知覚する能力が高く、「知覚優位」との関連が示唆された。DAM を活用して、より負担を少なく困難を見出す可能性が示唆された。

E-3

医療機関での里子—里親支援のあり方の検討の試み

○引土 達雄(心理士)¹⁾、前川 暁子²⁾、水木 理恵¹⁾³⁾、柳楽 明子¹⁾、辻井 弘美¹⁾、若松 亜希子³⁾、奥山 真紀子¹⁾

1) 独立行政法人 国立成育医療研究センター
こころの診療部

2) 東洋学園大学 学生相談室

3) 社会福祉法人 子どもの虐待防止センター

【目的】 インタビュー調査にて里親養育不調の危機や不調回避のプロセスの特徴を示し、医療機関における里子—里親支援のあり方を検討することを目的とした。

【方法】

対象者： 里子を委託されている養育里親、もしくはその経験がある者。

インタビュー内容： 「里子—里親の不調と改善について」とした。

【結果】

インタビュー協力者： 10家庭、11人。協力者の中で里子の措置変更を経験した家庭は3家庭。里子の問題が重篤で養育をやめようと思ったと答えた家庭がその他に3家庭。里子の年齢は、就学前～高校生。

里子の問題： 愛着の問題、自傷、性的問題、盗癖、非行、精神疾患等。

インタビュー内容の分析結果から： 里親は繰り返される里子の問題と日常的に配慮しなければならない里親—里子特有の事情を抱える。それらに里親が一人で頑張っても対応できない場合が多く、養育不調や措置変更の危機に至っている。精神医学的な問題と考えられる問題も多く、里親が孤立しないためには、医療機関もかかわる支援ネットワークが必要である。一方、里子との関係を改善させている里親は、サポートネットワークを広げ、困難打開への意識づけをし、里子や里親自身の家族に対してポジティブな気持ちを持って養育を行っていた。

【結論】 里子の問題の改善には、里子と里親家庭の包括的なアセスメントのもと、里子への治療や里親支援のネットワークが必要であり、その中で医療機関が果たす役割は大きいと考えられる。

E-4

地域子育て支援現場における養育者向け CARE (Chile-Adult Relationship Enhancement) プログラムの実践

○加藤 郁子(医師)¹⁾、福丸 由佳²⁾、吉川 陽子¹⁾、永田 智¹⁾

1) 東京女子医大 小児科

2) 白梅学園大学

【目的】 CARE プログラムは、既にエビデンスの示されている PCIT (Parent-Child Interaction Therapy：親子相互交流療法) の中核要素を取り出して、子供に関わる大人全般に適応を拡大した、簡便で広く実践可能な心理教育的介入プログラムである。一方、地域の子育て支援現場では、養育者が子どもの問題行動に苦慮し育児に悩みながらも、相談先や解決法が見つけれず、自信を喪失してストレス状態が悪化したケースがしばしば経験される。我々は、地域で養育者を対象に、養育スキルアップとそれによる育児不安の解消を目的として CARE プログラムを実践したので報告する。

【方法】 関東近県にて参加希望のあった養育者。4時間の CARE ワークショップを1～3回に分けて実施した。受講前後および2ヶ月後に調査を行った。調査内容は、ECBI (Eyberg Child Behavior Inventory)：子供の行動の評価尺度などである。

【結果】 ECBI 強度および問題数は、ワークショップ受講前に比べて受講後に低下した。特に受講前に得点が高かった受講者では低下の程度が著しかった。

【考察】 養育者達はワークショップに、意欲的に楽しんで参加していた。受講後「子どもが遊びの時間をとても喜んだ」「子どもの言葉が増え、集中力が増した」等の意見が聞かれた。調査の結果、今後 CARE を地域子育て支援の現場に展開していく事は可能で、育児スキルアップと養育者のストレス状態低下に有用であると予測された。

第111回日本小児精神神経学会
プログラム・抄録集

会 長：金生 由紀子 東京大学大学院医学系研究科こころの発達医学分野
東京大学医学部附属病院こころの発達診療部

事務局：東京大学医学部附属病院 こころの発達診療部内
〒113-8655 東京都文京区本郷7-3-1
FAX：03-5800-8664
E-mail：jsppn111@gmail.com

出 版： 株式会社セカンド
学会リポート <http://www.secand.jp/>
〒862-0950 熊本市中央区水前寺4-39-11 ヤマウチビル1F
TEL：096-382-7793 FAX：096-386-2025